



集落の経済学（準備号）

どんつきの村から世界を変える

集 落



共同体

人は山合いがもっとも生きやすいことを、体が知っている。

だから、世木にはなんでもある。

人は幸せを求めて自ら、人と人がつながり村をつくることを選んだ。

だから、世木は笑顔が絶えない。



多様な生きものがつながる自然環境が豊かな地域は、
人が生きていくうえで必要なものが多く整っている。

なのに・・・

田舎は都会より豊かに暮らせるはずなのに、
現代社会は、都会より田舎のほうが暮らしにくい、という。

これは、ちょっとおかしいのでは？

そういえば・・・

みんなが環境問題を解決しようとするほど、
問題は深刻化しているではないか。

みんなが集落の過疎化・高齢化を食い止めようとしているのに、
過疎化・高齢化は滞りなく進んでいるようだ。

みんなが貧富の格差を縮めようとしているのに、
格差は限界まで広がってしまいそうだ。

みんなが幸せを求めているのに、
すぐそこにあった幸せは未来へ未来へと遠ざかっていく。

なんか、おかしいことがいっぱい！

なぜなのだろう？



どうやら、
何か根っこの部分が歪んでいるようだ。

おそらくは、田舎がいちばん生きる力をもっているのだから、
田舎のパワーで根っこの問題を解決してみせて、
田舎から世界を変えていかなければならない。

これまで、
複雑で最先端の高度なテクノロジーに頼る方法では
うまくいっていないので、
きっと、正しいやり方は・・・

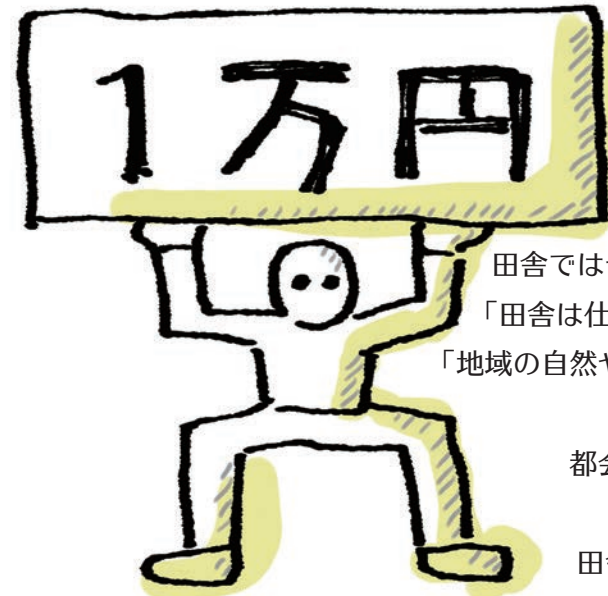
シンプルで、
あまりテクノロジーに頼らずに、
お金もあまりかけずに、
行動する個人にも負担をかけないで済む方法。

であるはずだ。

1

「働く」問題

働く＝お金になる



田舎ではやるべき仕事は山ほどあるのに、
「田舎は仕事がないから住めない」という。
「地域の自然や人のために働いても飯が食えない」
というのはおかしい。
都会のようにお金になる仕事
ばかりやっていると、
田舎の集落は維持できない。

働く＝傍を楽にする

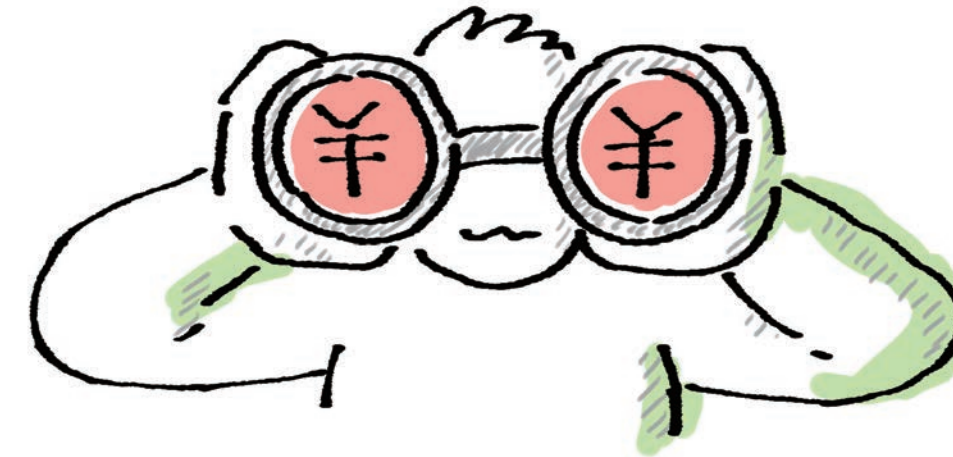


そもそも、
お金のためだけに働くのは
ちょっとしんどいのだ。

本来の「働く（傍を楽にする）」は、
自分もまわりの人も幸せにする働きがある。

本来の「働く」で、
十分に生活できるだけのお金を得るには
どうすればいいのか？

これは田舎だけでなく、都会も含めた現代社会全体の問題。



どうやってお金になる仕事を探すのか、ではなく、
どうやって今やっている仕事でお金を得るのか、を考える。

集落にとって大切な仕事をいかにお金とつなげるか、
または、集落と縁遠い仕事をいかに集落に貢献させるか、を考える。

2

「効率」問題

効率＝見かけを楽にする



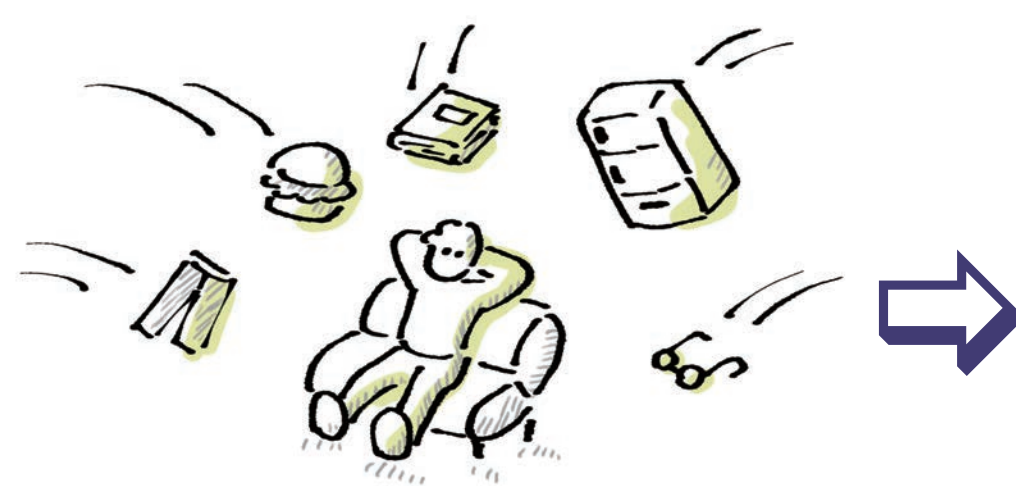
ずっと「効率」を追い求めて技術が発達してきたのに、どうしてゴミが増え続けているのか。
エネルギー効率はどんどん良くなっているのに、どうして地球環境はどんどん悪くなっていくのか。

効率＝全体が楽になる



そもそも、
便利、速い、というやつは、
自然物である人間にとっては
「効率」が悪いのだ。

「効率」を求めるのは生きものとして当たり前の行為なのだから、「効率」自体は悪いことではないはずだ。だとすれば、これまで求めてきた「効率」は実は効率的ではなく、非効率なものだったのかもしれない。



【本当は非効率な生活】 自分のエネルギーをなるべく使わず汗をかかないことが「効率」というものさ。
「効率」のためによそのエネルギーがどれだけ使われているか、なんて興味はない。
どれだけお金がかかるのか、には敏感だけどね。
だけど体を動かさないと不健康になるから、また、どこかのエネルギーを使って汗をかくんだ。
これも「効率」のうち??

本来の「効率」を求める地域社会を
構築するにはどうすればいいのか？
しごく自然なことなのだから、
そうむずかしくはないはずだ。

本来の「効率」を求めることができれば、
きっと環境と経済がかんたんに両立し、
世界の課題は解決するだろう。

目指すべき「まち」のカタチ

集落の持続可能な経済システム（もともと集落に備わっているもの）の特徴

- ・家を建てるのにお金をあまり使わなくて済む暮らし。
- ・食材を求めるのにお金をほとんど使わなくて済む暮らし。
- ・光熱費にお金をあまり使わなくて済む暮らし。
- ・子育てや介護でお金や苦勞を軽減してくれる暮らし。
- ・外貨を稼ぐ努力に余裕がある暮らし。
- ・
- ・

ひとりの力では困難でも、
人と人のつながりの力が、本来の効率の良い暮らしを容易に実現できる。

都会の中で、もっとも豊かな自然は「人」なのだから、人とのつながりを良くしていけば、
都会でも根っこの問題を解決することができるだろう。

少し昔の集落にはこれらを当たり前にする力があった。
もちろん、現代社会の暮らしの良いところもある。

なので、「昔にもどれ！」というのではなく、
昔の良いところを再発見し、
現代社会のなかで生かしていくのが良さそうだ。

具体的には、
どのように「まちづくり」を
進めていけばよいのか？

まちづくり⇔人づくり



根っこの問題「働く／効率」に正面から
向き合え、じっくりと取り組める「人」
を育てること。



地域の開発ではなく「人」の開発、さら
には「人と人のつながり（関係性）」の
開発が「まちづくり」。



「人づくり」のために、集落ごとの特徴
を生かした、問題解決プロジェクトを企
画・推進する。

人と人のつながり（関係性）が支えている多様な仕事

集落を持続可能にする仕事（働き）の種類

① お金を得ることができてお金の支出も減らせる仕事

② お金を得ることができるが直接は集落に貢献しない仕事

③ お金は得られないけど集落を維持するために必要な仕事

④ お金は得られないけどお金の支出を減らせる仕事

① の例として「農家」という仕事の場合

農産物で外貨を稼ぐこともできるが、自給のために集落内で消費することもできる。
しかし、集落の自然環境や自治活動が維持されているおかげで、安心して農産物を栽培することができている。

② の例として「会社員」という仕事の場合

集落外の会社に勤めて外貨を稼いでいる。
集落にある程度の人口・世帯による社会があり、さらに自治活動が維持されているおかげで、田舎の暮らしを楽しむことができる。

③ の例として「祭り」という仕事の場合

祭りは、集落の歴史と文化そのものであり自治活動の健全さの象徴でもあり、集落の楽しみのひとつでもある。
祭りの質は、防犯活動や見守り活動等の質と比例しており、人と人のつながり（共助）が豊かな共同体をもつ集落の質は高い。

④ の例として「おばちゃん」という仕事の場合

お節介な、おばちゃん、おじちゃん、おばあちゃん、おじいちゃん、という仕事は、ときに子どもを見守り、認知症を見守り、美化活動を行い、本来の効率や働きをすばらしく実践できている。
なにはなくとも集落において大切な働きの存在。

①～④は
仕事によって得られるお金と集落への貢献度が比例していない。



そんな不自然な「お金」への依存度を高めるまちづくりを行うと、集落が維持できなくなっていく。



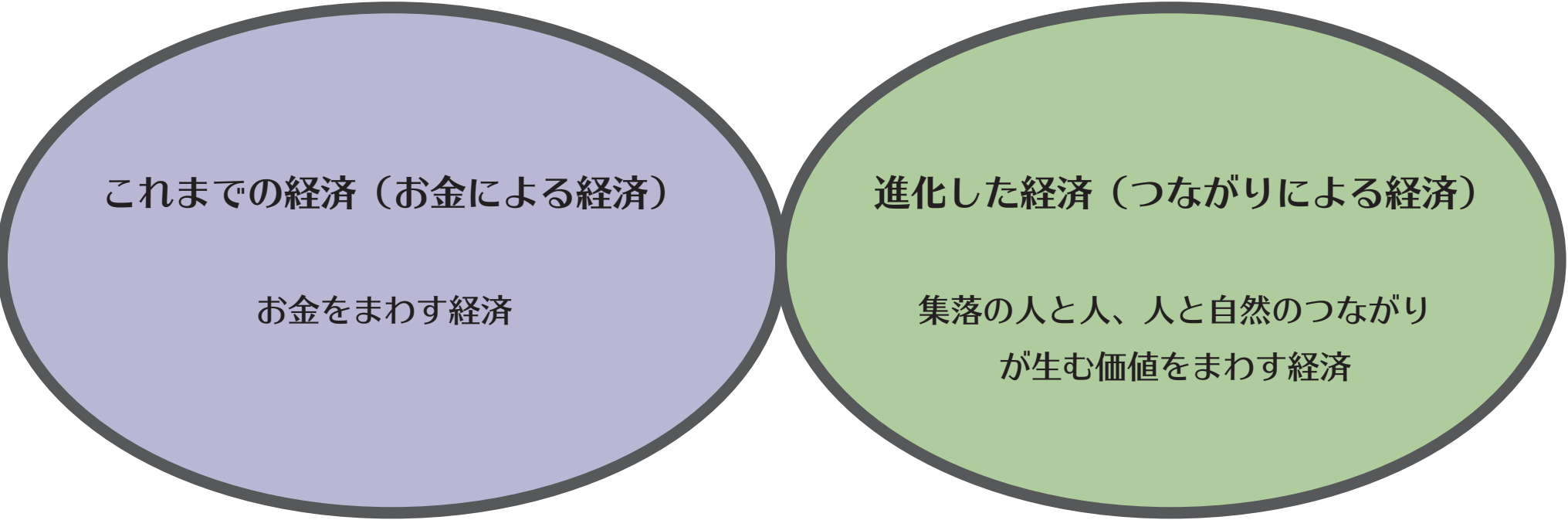
集落を持続可能にするためには、
どの仕事も同じ評価（報酬）が得られるように、
集落ごとに創意工夫することが求められる。



最初からどの仕事も同じ評価にしようとするのではなく、そこに向かうように少しずつ歩んでいく。
※歩みを止めないことが肝心。

集落にとって大切な多様な仕事の、
どれにも等価の報酬が与えられる
仕組みづくり

W ループ経済



パソコン、スマホ、車、旅行、、はお金が必要。

地域内で、地域の環境資源を持続可能な形で使い、生産し、消費し、自然に還る商品・サービスを増やしながら、
次ページの 2 種類の経済活動を行う。
（本来の集落の力を生かす）

- ① お金を使わずに、ぐるぐる回る「働く」の交換
- ② 本来の地域通貨による、ぐるぐる回る「働く」の交換

進化した経済（つながりによる経済）の進め方（案） ～効率のよい集落の経済システムを新しい時代に再構築する～

① お金を使わずに、ぐるぐる回る「働く」の交換

つながりトクちゃん

つながり経済をまわす情報交流サービス
つながりが、いつもの暮らしを楽しくする



【特徴】

- 家族、友人、知人ではない他人どうしても、話しかけやすい、助けを求めやすい「つながり」を形成し集落機能を高める。
- 集落（連携集落）内の誰もが「頼り頼られる」関係を構築する。
- 共助サービスを活性化させることで基本生活費用を削減する。
- 観光や広告等でのビジネスモデルにより事業を持続可能にする。



【運用イメージ】

1) 住民みんな（村外住民も含む）が利用できる端末を用意。

- ・スマホ用専用アプリ（またはフェイスブックなど）
- ・スマホを持たない住民用端末（タブレット、PC、掲示板）を、公民館、お店、役所、駐在所、道の駅、直売所などに設置。

2) 毎朝、住民が、トクちゃん（端末上のキャラクター）に話しかけると、
スタンプ帳にスタンプが1 個押される。

※スタンプが貯まると特典がもらえる。

※話しかけの内容は「おはよう」だけでも OK。さらに、今日の予定やイベント等の告知、ヘルプ情報（助けてほしいこと）、など。

<例>

「昨日、キュウリが採れすぎたのでお裾分けしたい」「病院に行きたいけど車がない」「田植えを手伝ってほしい」「明日の祭りの人手が足りない」「ちょっとお腹が痛い」など何でも OK。

3) トクちゃんに話しかけた依頼は、まとめて公開されるとともに、
依頼の内容に合わせて話を聞いてくれそうな人に相談を持ちかけるよう、
トクちゃんが依頼者に話しかける。

（逆に、相談にのってもらえそうな人に対して、依頼者に話しかけるようお願いもトクちゃんが行う）

※健康にかんする内容は非公開とし、コミュニティナース（病院）に提供される。

※高齢者等が安心オプションを申し込むと、申込者の日常の個人情報もコミュニティナース（病院）に提供される。

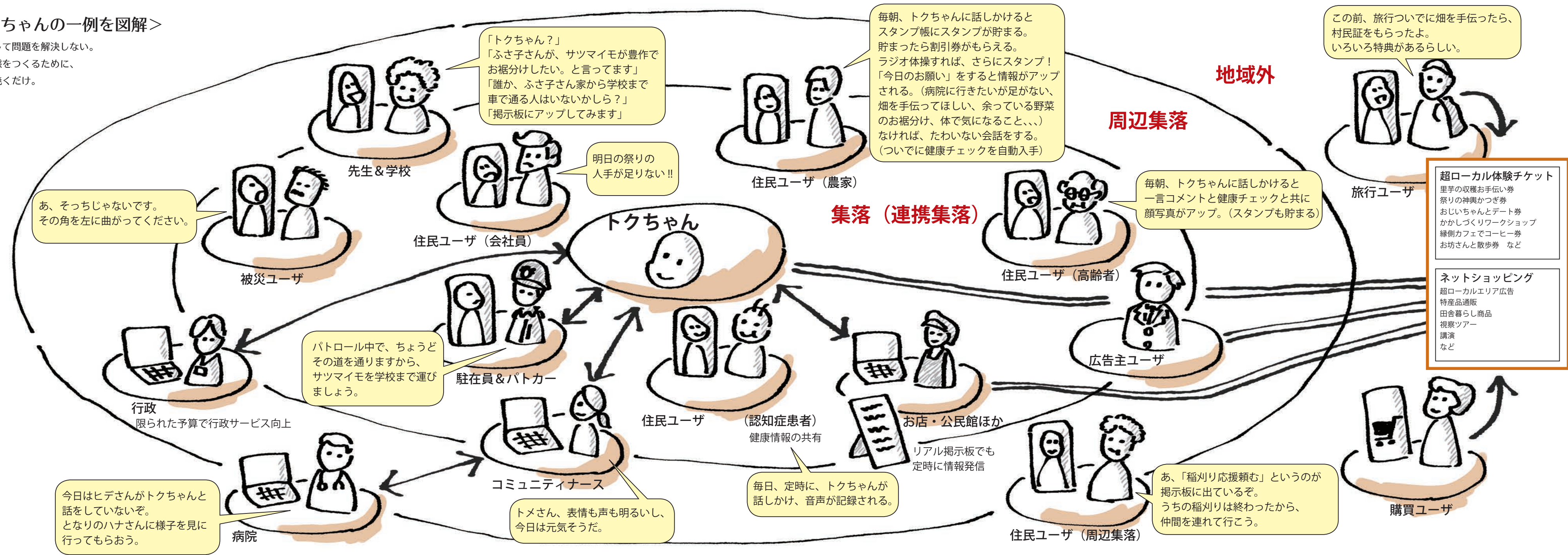
4) 集落ニュースを受け取ることができる。

（行政・自治体・医療機関等からのお知らせ、行事・イベントの告知 など）

＜お節介なトクちゃんの一例を図解＞

トクちゃんは自分では決して問題を解決しない。

問題を解決できそうな状態をつくるために、
人と人をつなぐお節介を焼くだけ。



② 本来の地域通貨による、ぐるぐる回る「働く」の交換

どんつき通貨（仮称）



つながり経済をお金に変換する
つながりの経済力の見える化

【特徴】

- 通貨が発行元に必ず返ってくるしくみ。
- 持続可能な運営のしくみ。
- お金がまわらないところへお金をまわすことができる。
- 特定の売場または商品に限定した割引負担。
- かんたんで使いやすい。
- 販売促進効果。
- 移住促進効果。
- 寄付効果。
- 集落機能への貢献。
- 地域自然への貢献。

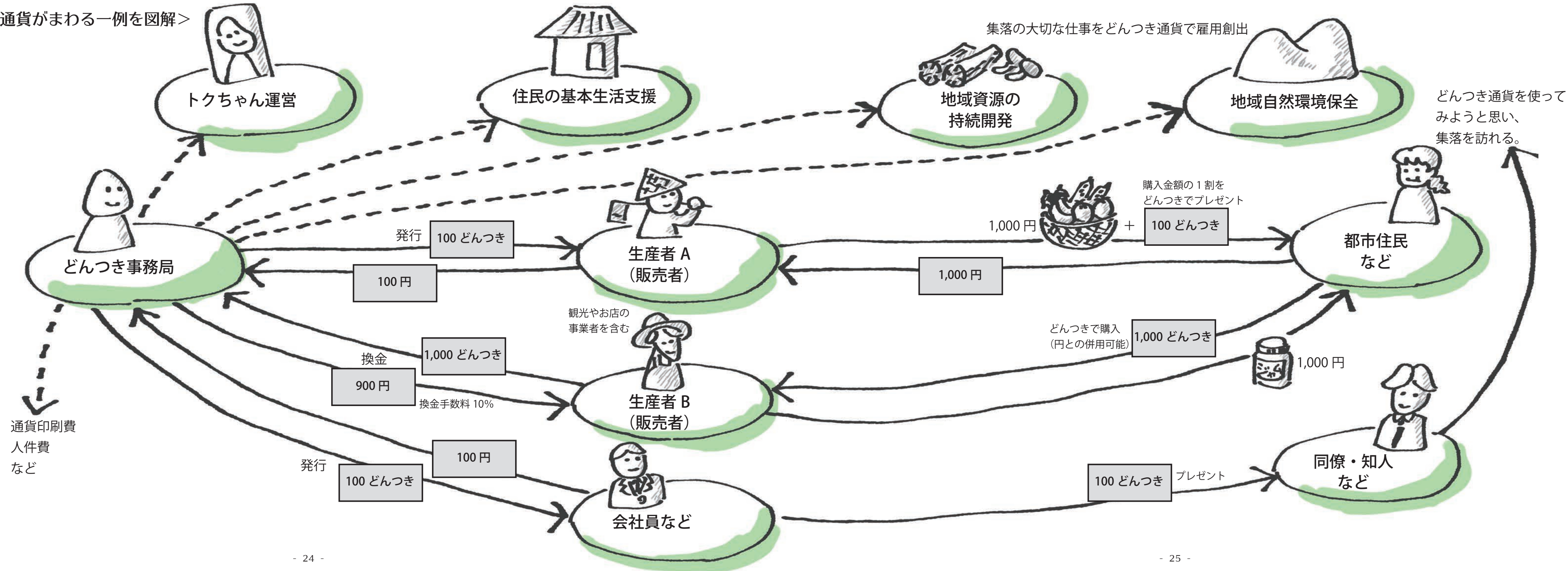
【運用イメージ】

- 1) 生産者 A は、100 円で 100 どんつきを発行してもらい、
1,000 円分の野菜を買ってくれたお客に 100 どんつきをプレゼント。
(どんつき通貨に参加した商品は、1 割引で販売し、割引分をどんつき通貨でお客に渡す)
- 2) お客はさらにお米などを買って貯まった 1,000 どんつきで、
生産者 B から 1,000 円のジャムを買った。
(どんつき通貨に参加している商品は、代金の一部または全てを、どんつき通貨で支払うことができる)
- 3) 生産者 B は手元にやってきた 1,000 どんつきを、どんつき事務局で 900 円に換金した。
(どんつき事務局は 1 割を換金手数料として受け取る)
「生産者は 1 割引で商品売り、お客は 1 割安く買うことができた」という一方通行の商取引に終わらず、通貨発行元のどんつき事務局にどんつき通貨がもどってくるたびに、まちづくり資金が生まれる。
- 4) I ターンの会社員が都会に住む友人たちへのお土産として、
どんつき事務局から 1,000 どんつきを買って友人にプレゼントした。
- 5) 田舎暮らしに興味をもっていた友人は、田舎に来て、1,000 どんつきでカフェを楽しんだ。
- 6) カフェの店主は、1,000 どんつきをどんつき事務局で 900 円に換金した。

どんつき事務局は貯まったお金で、里山保全のボランティアの謝金に当てたり、野草による新しい商品開発のための雇用資金にしたり、住民の光熱費の補助金に使ったり、と、いろいろな事業を展開していく。



<どんつき通貨がまわる一例を図解>



ゴール （ある程度の集落の理想の姿） づくりと ゴールへ向かう道づくり

理想や方法や進め方は
10 万地域 10 万色。

すぐにはじめられる、
無理なくできる、
続けられるやり方を考える。



1) みんなで、小さな幸せがいっぱいの集落の物語を想像する。

ひとつの理想の姿（ゴール）を共有する（風景、人口、家族構成、仕事、支出）

集落が続いていくためにみんなでやるべき仕事をリスト化。

それぞれの仕事を遂行するために必要な人数を計算。

大事な仕事をしている住民に対してきちんを報酬を支払う。

必要な仕事全体に対する適正な報酬（支出）額から、理想のまちづくりを考える。

理想の支出をもとに、必要な収入を考えれば、ゴールが見える。

2) 理想の半分ぐらいの目標を達成する年度を決める（10 年後？）。

3) 今後 3 年ぐらいの計画をつくる。

4) 1 年目の詳細計画をつくる。

5) あとは、進めながら軌道修正していく。

みんなで、千年つづくまちづくり

さて、これで一応の準備が整ったので、楽しく、みんなで、新たなまちづくりを進めてみましょう。

【行動指針】

無理がないこと

ウソをつく必要がないこと

続けられること

【「千年つづくまち」とは】

それぞれの地域がそれぞれの地域らしく、

そこにいる人を含めた自然環境を持続可能に保つために、

さまざまないのちのひたすらな「働き」があれば、

ふつうに幸せに暮らしていくことができる社会。

（地域共同体のなかでふつうに働けばふつうに食べられる経済システム）

この冊子は、2018 年 11 月から 2019 年 2 月にかけて行われた
連続 8 回のワークショップから生まれたものです。



「どんつきの村（世木）から世界を変える」ワークショップ

第 1 話／これからのために、集落が過疎化高齢化してしまう真の理由を知る

第 2 話／集落だからこそできる、幸せと経済の両立

第 3 話／二宮尊徳のまちづくり手法から学ぶべきもの

第 4 話／幸せと経済の両立を果たした、世界のまちづくり事例からヒントを得る

第 5 話／毛原の持続可能経済システムを学ぶ

第 6 話／世木だったら、こうすればいいかもしれない

第 7 話／みんなでつくる、世木の幸せ経済づくり

第 8 話／無理なく持続発展するストーリーづくり

そして、2019 年 4 月より、実践を積み重ねながら、集落の経済システムをつくりあげていきます。

発行日／平成 31 年 3 月 30 日

発行人／世木地域振興会

企画／中世木ビジョン委員会

編集・デザイン／NPO 法人いのちの里京都村

